

1月5日 神戸市垂水区多聞台2丁目 多聞寺 追儺式

天台宗、多聞寺は当今流行のマンモス団地造りの拡大されて行く狭間に、ほんの申訳のように残った昔からの地表で、舞子駅から団地行のバスで行っても、始めて少しばかりの冬田が残っている。山田川畔に地名も昔の「古屋敷」と呼ばれていたのがなくなり多聞台という新名に改められて、その端っ子に寄寓しているような崖裾にある。もとは黒々とした山稜であったであろうと思はれる背後の丘にも、堂々たる団地のコンクリート造の屋並が続いて、テレビのアンテナと洗濯の干物とが多聞寺の法要の幟旗よりも、きらびやかに、昨夜からの大雪を降らせた今年1番の寒波になびいていた。

本堂は改築なったばかりのコンクリート造り、今日の追儺式のため本堂のセメント造りの土壇の前方に1間棧敷を組んで鬼の踊り場とし、そのため本日に限って正面石段は棧敷の下となって登堂できず棧敷板の下に賽銭函だけがでんと出張している。前方棧敷の手摺の両端と右側の奥丁度鬼部屋のある外の所と3ヶ所に、以前玉津町の日輪寺で見たような、鉄の箒桶が吊ってあって、青年が盛んにそれに薪を焚き、その傍に苧穀の束の松明が10数束用意してあり、外側の地面に水をはった4斗樽が用水漕となって、青竹の先に縄束の水箒が突込んであった。

鬼桶は専らこの堂の前面の臨時に広くした土壇棧敷の上で行われる。仏前には櫛の枝に紅白の紙の花を沢山つけた山飾りが立てゝある。

本堂内の鬼部屋に近い側に行法次第の貼紙がしてある。

多聞寺修正会結願法要次第

先、初夜導師作法 午後2時より

敬礼法、唄願、発願、行法次第

稚児鬼

次、追儺之儀。初夜導師作法終って直に出鬼

出鬼差足

先、第一番 一鬼 婆々鬼所役 浪之華 除穢

次、第二番 三鬼、次郎鬼、太郎鬼 婆々鬼の順

百味之飯食(餅)授与

次、第三番 三鬼、第二番に同じ

次、第四番 二鬼 次郎鬼、婆々鬼、の順

百味之飯食(餅)授与

次、第五番 一鬼 太郎鬼 第四番同儀

次、第六番 三鬼 第二番と同順、百味之飯食(餅)及び牛王宝印版巻物三幅(一鬼一幅づゝ)授与

次、第七番 三鬼、逆回、山飾り授与。

右之外、第一番鬼以前仔鬼四鬼作法有別

此作法第七番出鬼にて了ル也

右具在前

多聞寺の修正会は12月31日夜、除夜の鐘を撞き終ったときより始め、5日間修する。その結願の初夜行法である。尤も初夜修業は午後6時より初まるのであるが、火を用いるので用慎のため江戸時代より特許を受けて未刻より始め申刻(午後2~4時)に了ることにした。

修正会結願作法はまづ般若心經に始まり次に観音經、続いて、多聞寺独特の初夜導師の作法がある。初め奉請でこれは仏名と礼拝とを兼ねたもの。次いで、発願(大音)

礼拝、発願、行道(世尊偈)牛王加持心經、発願、祈願、回向に移り、同時に鬼の出となる。

鬼所役、介添、警固総て現在は青年団が担当している。

服装。

太郎鬼と婆々鬼は茶色。次郎鬼は黒色の上衣半纏、たっつけ袴。上衣とたっつけは共に鬼縛りを白の衣テープで格子縞に縫付けてある。白い帯を占め、更に白衣を燃絞った襷をかけ、後で横綱結びにする。袖口は同色の衣結で括る。

ゴム裏の運動靴。草鞋ばきと足首は白紐で括り、着物と同色の色足袋。

太郎鬼は赤い鬼面をつけ斧を持つ。

次郎鬼は黒い鬼面をつけ、槌(振り鼓という)を持つ

婆々鬼は赤い鬼面をつけ、剣を持つ。

子鬼(稚児鬼とも)4人は12~13才の子供(男)

2人は茶褐色、2人は紅茶色の上衣、4人とも茶、黒、藍の太い縦縞のある白地布のたっつけをつける。袖口は括る。冠って腰の辺まである長い赤熊を被って顔を隠す。運動靴のまゝ、長さ70cm位の檜の棒を持つ。

子鬼は鬼の出の前に入る。鬼は7回出るが毎回鬼が退場すると、次の鬼の出までの継ぎに入る。

正面踊場の左端の所で2人づゝ向合い、大太鼓の拍子に合わせて向合っている小鬼と棒をカチカチと2度打合ってから位置を入れ替え、向合って打合う丈けの簡単な所作で、次の鬼の出を知らせる。大太鼓の乱拍子となると、廊下の左隅にかたまって、鬼の踊を見物している。

鬼の出は、鬼部屋より出るが、そのとき鬼部屋に吊ってある半鐘が乱打される。左手に採物を持ち、鬼部屋を出るとすぐ、その場で松明を受取って、これを振り回しつゝ正面右端の角まで来ると松明で床を摺って、投げる。火

の用慎のため今はその場に捨てるように置く。すぐ、そこで替りの松明を受採り、棧敷の左端の方を向いて、両手を高く斜に延ばす。次いで早足で正面に移り前方及び仏前の方に向って再び両手をあげ、こゝで松明を替えて左端に移り、向き直って両手をあげる。この作法は1人だけ出るときも、2人又は3人出るときも同じで、3人出るときは、最初が黒（次郎鬼）、次が太郎鬼、3番目が婆々鬼である。

次いで、松明を振りつゝ正面仏前の方に向いて激しく松明を振ると、松明を捨て、採物を腰の後にさす。

次いで、その番順により、住職より、塩、餅を頂くのであるが住職は黒塗の三宝に載せて渡す。これを少し前かがみになって頂く。これを4方に撒く。少しおどけた撒方をすることもある。

撒き終ると再び採物を左手に持ち、仏前に向って、貰った松明を少し頂くようにして、初めのときのようにこれを振回して、右端より鬼部屋へ入る。

第7番目の山飾りのときは枝を引裂いてはこれを見物人の方へ投げる。

『播州名所巡覧図絵』巻之一によれば

「当寺及び此近郡御朱印の伽藍地には春のはじめ鬼追という法事あり。いつの頃よりはじまりしかにやしらず、寺領の百姓其役に当る者、数十人前年十二月末より精進潔齋し、其日暮六ツ時より一山の僧徒堂に参集し仏前に万灯をかゝげ読経戌の中刻に至れば内陣より大小の太鼓、法螺、鉦を打、年十四五より廿年までの男子十人ばかり異形に出立、貝、鉦、太鼓の序急破に合せて棒を打合せ、さて急拍子と成れば内陣より五色の大鬼五人あらはれ出る。これを見て小鬼はちりちりに逃去なり。此大鬼の面は三尺斗にして甚古物也。身体すべて鬼形をうつし、手には白幣、斧、鉞、大炬火、檜杖等を持てり。小鬼を追いならひて炬火斧を打ふりて堂内を踊りめぐる」

この記述と、現在の追儼とは可なり相違がある。ことに鬼面は現在使用のものは左程古いものではなく、大きさもそれ程大きくない。